



市民 登場

No.768

内なる自分を表現する現代アーティスト・書家

稲垣 尚毅さん

◆いながき なおき 「書」と「絵」の表現を武器に関西各地でライブパフォーマンス披露や作品展を開催。アディダスホームページなどメディア掲載も多い。5月に香港で開催される「Affordable Art Fair Hong Kong」への出展も決定するなど活躍の場を広げている。南楠葉在住。36歳。

人生の「×」も大切な自分の一部。
そして、周りにはもつと「○」もある

黄色、青、緑とアクリル絵の具を筆で思いのまま塗っている。マーカーで引く線は一見無作為だが、いつの間にかキャンバスにはボクサーのようなキャラクターの姿が浮かぶ。絵の着地点は描きながら決め、悩んだ時は庭で土や草に触れ自分と向き合う。「自然に囲まれ余分な情報を断つことで他人に引きずられないようにしています」

代えがたいですね

22歳の時、尊敬する父が病で亡くなり命の有限性を痛感した。「二回きりの人生、やりたいうちに時間を使いたい」。大学卒業後、鍼灸師として働いていたが26歳で「書」の道へ。中学生の時、自分の目を見て直感で言葉を書いてくれた書家との出会い以来、なぜか気になっていった世界だった。「怖い時こそ一歩前に出よう」「自分を一番優先する時があってもいい」。対面し感じたありのままの言葉を筆で書き下ろす書家となり、これまで8万人以上に作品を手渡してきた。「作品を通じて気持ち伝えた感覚は何事にも

偶然訪れた服飾店で、もう一つの転機が訪れる。1980年代のアメリカの画家、バスキアの絵がプリントされたTシャツに心を突き動かされた。子どもが無心で描いたような自由で不規則な絵に「俺もこんな絵が描きたいねん！」と同じ画材を買い集め独学で絵を描き始めた。「表現するのは自分の感情。その軸だけは守っています」

最近、お気に入りの作品ができた。無数の「○」と数個の「×」で埋め尽くされたパネル。○と×の両方があるから人生は調和している、という考え方は、鍼灸師だった時に学んだ陰陽論の考え方そのものだった。「自分の人生全てが作品に生きていると気付いたんです。×も大切な自分の一部で無駄なことじゃない。そして、周りにはもつとたくさん○があるはず。この作品を見た人にも、そう気づいてほしい」。彩りを増していく人生の全てを、これからもキャンバスへぶつけ続ける。

「表現するのは自分の感情。その軸だけは守っています」

自慢の写真・イラストが表紙に!?

枚方の風景などをテーマにした写真・イラストを大募集。▶応募 メールまたは市ホームページの専用フォームに住所・氏名(ペンネーム希望の場合はペンネームも)・年齢・電話番号・メールアドレス、作品の説明・題名を書いて作品データを添付し広報プロモーション課(☐kouhou@city.hirakata.osaka.jp)へ。詳細は市ホームページ参照。

※応募作品は市公式フェイスブックやInstagramで公開します。



専用フォーム
はこちら



「待ち合わせ場所」

今月号の表紙写真は、フクさん(31歳)が令和6年4月に山田池公園で撮影。「子どもとお花見に行ったときの待ち合わせ場所で、青い空と芝生の緑、桜色のじゅうたんをきれいに撮影できました。いつまで子どもは一緒にお花見に行ってくれるかな。」

